九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『彼岸過迄』における偶然性の問題

廣瀬，裕作
筑紫女学園短期大学非常勤講師

https://doi.org/10.15017/8476

出版情報：九大日文. 5, pp.177-206, 2004-12-01. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：

『彼岸過迄』における偶然性の問題

廣瀬 裕作（HIROSE Yusaku）

一　『門』から『彼岸過迄』へ

『彼岸過迄』[1]の敬太郎が、蛇を象った洋杖（ステッキ）が「偶然東向に倒れてゐる」ことに気が付いて、占い婆さんの「気を付けないと遣り損ないます。さうして遣り損なへば夫つきり取り返しが付かない事です」という「予言」を想起し、それが或る特定の「方角」を指し示していると判断することは、『門』の宗助が、家主の坂井を介して危うく安井と「隣り合せか、向ひ合せに坐る運命」に陥りそうになるという「偶然な出来事」に遭遇して、そこに自らの「罪」からは逃れられないという啓示を読みとる設定の反復であるように思われる。そこではいずれも偶然性が、何ものかの意図を隠している暗号として、従ってたんなる偶然性ではありえないものとして感受されている。それらが偶然に見えて実は偶然ではないからこそ、それは何かを告知するものとして現象するのだ。

けれども、『門』においてそのような「運命」概念を喚起する偶然性が、罪の意識からの脱却を求めて宗助を参禅に導くという、主人公の心理ないし内面の問題として終始するのに対し、『彼岸過迄』では、偶然性は、登場人物が物語の中で出会う「出来事」ないしエピソードであるにとどまらず、同時に、テクストの形式そのものを規定してゆく機能として、即ち漱石の言う「離れるとも即（つ）くとも方（かた）の附かない短篇」（「彼岸過迄に就て」[2]）という構想そのものを可能にする機能としてあると考えられる。このような差異があるとき、『彼岸過迄』においても、依然として偶然性は、『門』同様に、「運命」という概念に象徴される目的論的世界観に還元されるべきものとして構成されているといえるだろうか。言い換えるなら、『彼岸過迄』の偶然もまた、或る特定の意味を〝意味するもの〟として、従ってそのような意味を告知する何ものかの〝意図〟に行き着くべきものとして構成されているといえるだろうか。

二　「独立なる二元の邂逅」としての偶然性

『彼岸過迄』の「停留所」「報告」において三人称で語られる敬太郎の「探偵」場面は、小宮豊隆の「普通の探偵小説よりも遥に面白くない、探偵小説にしかなつてゐない」という酷評以来[3]、低徊的な写生文で探偵小説を書くという、本来両立し難いものを組み合わせた奇妙な試みとして、後半の須永と千代子に関する章を呼び出すための手続きにすぎないとも見なされてきた箇所であるが、これらの章を探偵というキーワードの裏に偶然性への問いを潜ませた箇所として、というより探偵行為

と偶然性の問題とが交叉する場面として読むと、何か違った光景が見えてくるのではないか。その問いに答えるために、偶然性が意味するということがいかなることなのか、個々のケースについて詳細をみよう。

『門』において、安井と再会しそうになるという事態が「偶然の度はあまりに甚だしかつた」「普通の人が滅多に出逢はない此偶然」と叙述されるほどの稀有な「偶然」として表象される理由は、直接には、そのような再会に至る経緯の確率的な希少性（「彼は満州にゐる安井の消息を、家主たる坂井の口を通して知らうとは、今が今迄予期してゐなかつた」等々）を指しているにすぎず、その限りではたんに経験則に基づく判断にすぎなかった。しかし宗助にとってはそれは、彼の意識においてしばしば「天」として表象される何ものかの意志によって仕組まれた出来事であるかのように現象する。『薤露行』にも「罪は吾を追ひ、吾は罪を追ふ」とあるが、自分では罪から逃れているつもりだったのが実は罪を追いかけているのと同じであったという驚きを喚起するからこそ、この偶然は宗助を震撼させる偶然（運命）となるのである。同様にそれに先立つ御米との出会いに関しても、「宗助は過去を振り向いて、事の成行を逆に眺め返しては、此淡泊な挨拶が、如何に自分等の歴史を濃く彩つたかを、胸の中で飽迄味はひつゝ、平凡な出来事を重大に変化させる運命の力を恐ろしがつた」（引用文の傍点は引用者、以下同様）と回顧される通り、それは振り返る者に「運命の力」という概念を呼び起こす偶然としてある。

このような偶然性を定義するならば、互いに遭遇する必然性を持たない別個の因果系列同士が、事象の中の或る一点において〝理由なく〟交叉することにより、あらかじめ予測できない何らかの出来事なり意味なりが生じてしまうという構図が想定されているという意味で、九鬼周造の『偶然性の問題』[4]における偶然性の定義、即ち「独立なる二元の邂逅」に当てはまるだろう。九鬼が、「偶然に対する形而上的驚異は運命に対する驚異の形を取ることがある。偶然が人間の実存性にとつて核心的全人格的意味を有つとき、偶然は運命と呼ばれるのである。さうして運命としての偶然性は、必然性との異種結合によつて、「必然—偶然者」の構造を示し、超越的威力を以て厳として人間の全存在性に臨むのである」（三—十二）と書く通り、宗助が遭遇する偶然の交叉は、それが起こるべきいかなる必然性も事前に想定できず、しかも結果として彼の「実存性にとつて核心的全人格的意味を有つ」がゆえに、そこには彼を「驚異」させる「運命」の概念が——従ってそのような「運命」を宗助に割り当てた存在（天）の表象が——喚起される。

ここに捉えられているのは、「運命」としての偶然性は、何ものかの意志無しに生起することは不可能だという印象を喚起するがゆえに、まさに自らの反対物である絶対的な必然性（必然—偶然者）に転換（回帰）するという動きである。九鬼は、「偶然性の核心的意味は「甲は甲である」といふ同一律の必然性を否定する甲と乙との邂逅である。我々は偶然性を定義して「独立なる二元の邂逅」といふことが出来るであらう」（二—十五）

「偶然性は一者と他者の二元性のあるところに初めて存するのである」（結論）と、「二元性」を確保することこそが偶然性の「根源的意味」であると規定していたにもかかわらず、運命と化す偶然性を語る段階で、結局は偶然の邂逅を「内面化」し、偶然性を「絶対的必然」の同一律に回収してしまう。「経験に齊合と統一とを与へる理論的体系の根源的意味は他者の偶然性を把へてその具体性において一者の同一性へ同化し内面化することに存してゐる。（略）思惟の根本原理たる同一律は内面化の原理にほかならない。（略）判断の本質的意味は邂逅する「汝」を「我」に深化することでなければならない」。そこでは偶然性は、あらかじめ先取りされた一元的な始源＝目的を実現するための、織り込み済みの逸脱としてのみ生起する。

このような、偶然性とはそれを通じて「絶対的に一なるが故に絶対的に必然」である「絶対者」が実現される場としてあるという捉え方からみれば、『彼岸過迄』の偶然性はどのように位置づけられるか。

斯う考へた敬太郎は已を得ないから運を天に任せて何方か一方の停留所丈守らうと決心した。（略）所へ後の横町から突然馳け出して来た一人の男が、敬太郎を突き除ける様にして、ハンドルへ手を掛けた運転手の台へ飛び上つた。（略）彼は敬太郎に当つた拍子に、敬太郎の持つてゐた洋杖（ステッキ）を蹴飛ばして、それを持主の手から地面の上へ振り落さしたのである。敬太郎は直曲（すぐこと）んで洋杖を拾ひ上げやうとした。彼は其時蛇の頭が偶然東向に倒れてゐるのに気が付いた。さうして其頭の恰好を何とはなしに、方角を教へる指（フィンガー・ポスト）標の様に感じた。「矢つ張り東が好からう」（停留所二十六）

敬太郎が遭遇する偶然性、即ち、通行人にぶつかられて洋杖（ステッキ）を取り落とした時、洋杖が「偶然東向に倒れ」たという偶然性は、その方角を選択することが、結果として夕闇の雑踏の中で同じ方角を眺める「何処の何物とも知れない女」との「邂逅」を可能にし、その女が敬太郎の「探偵」行為の対象と待ち合わせており、しかも以前からその「後姿」だけを目撃して「正体」を探ろうとしていた須永の従妹千代子だったという偶然の連鎖に結びつくという意味で、九鬼のいう「独立なる二元の邂逅」を文字通り実践しているといえるだろう。

陰鬱な冬の夕暮を補なふ瓦斯と電気の光がぽつぽつ其所らの店硝子を彩どり始めた。不図気が付いて見ると、敬太郎から一間許の所に、廂髪に結つた一人の若い女が立つてゐた。（略）何時何方から歩き寄つたか分らない婦人を思はぬ近くに見た時は、何より先にまづ其存在に驚ろかされた。（略）一人は降りると直に女の前に行つて、其所に立ち留まつた。（略）彼は自分が先刻から馬鹿を尽して付け覗つた本人がやつと今電車を降りたのだと断定しない訳に行かなかつた。彼は例刻の五時が疾うの昔しに過ぎたのに、妙な

酔興を起して、矢張り同じ所にぶら付いて居た自分を仕合せだと思つた。其酔興を起させるため、自分の好奇心を釣りに若い女が偶然出て来て呉れたのを有難く思つた。（同、二十六〜三十）

まさに二元のそれぞれ別個の因果系列同士の軌跡を象徴するような、互いに全く無関係な動機から交差点に立つ敬太郎と千代子が、洋杖が指し示す「偶然」の交点において、「運命」的な邂逅を果たす。この「自分の好奇心を釣りに…偶然出て来て呉れた」廂髪の女を「観察」するために敬太郎は、指定された時間帯が過ぎ街に灯りが灯った後もその場に居残っていたのである。九鬼の言う「独立なる二元の邂逅」が、暗黙に、「媚態とは、一元的の自己が自己に対して異性を措定し、自己と異性との間に可能的関係を構成する二元的態度である」（『「いき」の構造』（二）。）という異性との「いき」な交叉を含意していることを考え併せるなら、宗助における御米との出会いとともに、敬太郎の偶然は「独立なる二元の邂逅」という表現の原義に沿っているといえるだろう。もちろん、『彼岸過迄』の物語世界で、実際に千代子との、「幻しに似た糸の様なものが、二人にも見えない縁となつて、彼等を冥々のうちに繋ぎ合せてゐるものか。夫とも此夢で織つた帯とでも形容して然るべき散ら散らするものが、或時は二人の眼に明らかに見え、或時は全たく切れて、彼等をばらばらに孤立させるものか、――」という途切れるとも繋がるともつかない糸で結ばれているのは須永市蔵なのだから、千代子にとっては、夜闇の迫る雑踏の中で自分に「普通以上の注意」を注いでいるらしい見知らぬ男（敬太郎）とは、警戒すべき「何処の何物とも知れない男」「何を仕出かすか分らない人」にすぎないのだが、それでも、ともかく敬太郎にとってこの「邂逅」が後に続く田口家や松本家の人々との交渉を開始させ、千代子と須永との間に纏綿する「離れる為に合ひ、合ふ為に離れると云つた風の気の毒な」関係性を聞き出す機縁となってゆくという意味で、この洋杖の偶然性が、敬太郎の「同一律の必然性」を否定する「甲と乙との邂逅」として機能していることは間違いないだろう。

だが、敬太郎の「探偵」場面が「二元の邂逅」としての偶然性に取り憑かれているということの証拠はそれだけではない。というのも、そもそもなぜ敬太郎がここで蛇を象った洋杖を持っているのかというと、それは「今此所で何うしたら可いか」を占ってもらった文銭占いの婆さんに、「貴方は自分の様な又他人（ひと）の様な、長い様な又短かい様な、出る様な又這入（はい）る様なものを持つて居らつしやるから、今度事件が起つたら、第一にそれを忘れないやうになさい。左様すれば旨く行きます」と「助言」されたからであり、そしてその「禅坊主の寝言に似た」助言が、「自分の所有の様な又森本の所有の様な」、森本から贈与された洋杖を指していると判断したからにほかならなかった。この、陰陽の理を占う婆さんによって事態が進展してゆくという設定が既に、停留所に至る経緯が二元の交叉としての偶然性の管轄下に置かれていることを示唆している。というのも、九

鬼が言うように、陰陽二元による易占いというものが既に、二元性としての偶然性という概念の恰好の適用例にほかならないからである。

周易の指導原理も邂逅としての偶然にある。陰陽二元論が飽くまでもその本質であり、甲の爻と乙の爻との期せざる邂逅が易全体の基礎である。爻とは交の義、邂逅の意にほかならない。易は交易である。「繫辞伝」に（略）は易が天地人生の変動の中に動的相対性としての二元の偶然的交叉をその具体性に於て観るものであることを述べてゐる。

（『偶然性の問題』第二章十六）

すなわち、「文銭占なひ」の婆さんの、「是を御覧なさい。斯う縒り合はせると、一本の糸が二筋の糸で、二筋の糸が一本の糸になるぢやありませんか。そら派出な赤と地味な紺が」という言葉にある、縒り合わせられる二筋の糸が既に、「陰陽の理」としての「独立なる二元の邂逅」の暗喩なのであり、そうであればこそ、敬太郎が選択した一方の方角に「派出な赤」としての千代子の映像が「ちらちら」と織り交ぜられることになるのである。そのことにより、「ぢや其紺糸で地道を踏んで行けば、其間にちらちら派出な赤い色が出て来ると云ふんですね」「さうです、左様なる筈です」という婆さんの「予言」が成就する、という形となっている。

しかも、そのような占い婆さんの「助言」に従って敬太郎が洋杖を携帯し、そしてそれが転がった「方角」を婆さんの占いと関連づけるのは、「今日四時と五時の間に、三田方面から電車に乗つて、小川町の停留所で下りる四十恰好の男がある。（略）彼が電車を降りてから二時間以内の行動を探偵して報知しろ」という実業家田口による探偵「依頼」に対処するためだったのだが、この、限定された時間帯の中で特定の方位を選ぶという設定もまた、この「探偵」場面が偶然性のテーマにこそ直結してくるということを物語っている。というのもふたたび九鬼が、

経験界に於ける積極的相対的偶然の主要契機は同時性であることを明かにした。さうして、同時性はその本質上、空間性を暗示してゐる。換言すれば勝義の偶然性は二つ或は二つ以上の因果系列の交叉点に存するもので「ここといま」に成立するものである。（略）なほ、経験的積極的偶然における時間空間的限定の役目は謂はゆる方位判断の構造を見ても容易にわかる。方位によつて吉凶を判断するのは、遭遇すべき吉凶を方位の偶然性に還元して理解しようとするに外ならない。但しその場合の方位の具体的内容は方位そのものではない。時間によつて限定された方位である。或る時間に或る空間へ向つて移動することが、或る一定の人にとつて吉とか凶とか判断されるのである。（同、第二章十八）

と指摘する通り、洋杖という「陰陽の理」を司る呪物は、まさに「時間によつて限定された方位」の吉凶を占うためにこそ使用されるのであるから。前田愛によれば『『彼岸過迄』の登場人物をむすぶ運命の赤い糸もまた、いったんこのT字路にあつまり、そこから新しい局面にむかっておもむろにほどけて行くというような構造をもっているのである」[7]というこの場面の敬太郎の行動は、まさに「時間によって限定され」た中で、「遭遇すべき吉凶を方位の偶然性に還元して理解しよう」とする行為として理解できるのであり、そうであればこそ、この蛇の頭の洋杖は、陰陽の理を司る方位磁針として、「甲の爻と乙の爻との期せざる邂逅」としての千代子との遭遇を可能にし、ひいては松本を発見するという「吉」を呼び寄せることとなるのだ。さらに、九鬼が「易は交易である」と言うとおり、「交易」の場としての駅（小川停留所）は、どちらの方位を選ぶべきかという二者択一の二元性が問われるに最もふさわしい場となるだろう。

このように、「方位」を操る小道具を手にして敬太郎は四時から五時の間の特定の方角を睨んで立っているという意味で、この「探偵」行為が繰り広げられる停留所に収斂する経緯は全て、陰陽の理に支配された磁場としてあるのであり、この前半の展開全てが何重にも二元の交叉の主題を反復しつつ、それらが一挙に千代子との遭遇という出来事に収斂してゆくという形となっている。すなわち敬太郎が本当に「探偵」しているのは、相手に知られずその素行を探るという「徳義」問題に関わる他者の秘密ではなくて、二元の邂逅としての偶然性なのである。言い換えるなら敬太郎は、松本や千代子との邂逅という現象を通じて、占い婆さんに仕掛けられた「予言」が成就するか否かという、目的論（目的的必然性）をめぐる問題をこそ「探偵」しているのだ。

三　妙な洋杖（ステッキ）の機能について

右の通り、『彼岸過迄』においても『門』同様に、偶然性が二元の交叉として捉えられていることから、始源において先取りされた「必然―偶然者」の自己実現としての、九鬼的な運命観が暗黙に前提されていると予測される。実際、敬太郎は、「兎に角出て其所いらを歩いてるうちに、運命が自分を誘ひ込むやうな占ない者の看板に打つかるだらうといふ漠然たる」思惑から文銭占いの婆さんに遭遇するのであり、「一心に縫物をしてゐる、純然家庭的の女が、自分の未来に横たはる運命の予言者であらうとは全く想像の外にあつた」「偖此九枚の文銭が、暗い中で自分を操つでゐる運命の糸と、どんな関係を有つてゐるか、固より想像し得る筈がないので、」と訝しみながらも、この女性から、「進まうか止さうかと思つて迷つて居らつしやるが、是は御損ですよ。先へ御出になつた方が、たとひ一時は思はしくない様でも、末始終御為ですから」と助言されてその通りに行動し、結果的に「眉と眉の間に大きな黒子がある」紳士の「探偵」行為を成功させ、田口に報告することによって衣食

の道を確保するという意味で、彼自身の「運命」を形作るために陰陽の理や洋杖が大いに貢献しているかのようにみえる（「彼は夫がために位地に有つく事は出来た」）。従って、自らの「運命」に遭遇した『門』の宗助が、「父母未生以前本来の面目」にまで遡ってその因果を明らかにしようと試みたごとく、「暗い中で自分を操つてゐる運命」という概念が礎石になるべき目的論的世界観として、敬太郎の「邂逅」場面も組織されているかのように見える[8]。この短篇連作の最後が、「さうして、大きな空を仰いで、彼の前に突如として已んだ様に見える此劇が、是から先何う永久に流転して行くだらうかを考へた」という一句で締め括られることも、九鬼のいう偶然と必然とが織りなす流転的循環によってこのテクストが統御されているという見解を支持するように思われる。とするとやはり、『彼岸過迄』も、九鬼の言う、偶然―必然のサイクルを通じて「運命」が抽出されるという予定調和に属すということになるのだろうか。

ところで、注意すべきなのは、この偶然性をもたらす敬太郎の洋杖が、千代子ないし松本と出会うという物語内容を可能にしているだけでなく、同時に、『彼岸過迄』というテクストの形式そのものを導く小道具としても機能するということだ。すなわち、「鶏卵とも蛙とも何とも名状し難い或物が、半ば蛇の口に隠れ、半ば蛇の口から現はれて、呑み尽されもせず、逃れ切りもせず、出るとも這入るとも方の付かない状態」という洋杖の「方の附かない」有りようが、『彼岸過迄』の構想を語る作者漱石の言葉「けれどもよし旨く行かなくつても、離れるとも即くとも方の附かない短篇が続く丈の事だらうとは予想出来る。自分は夫でも差支へなからうと思つてゐる」という言い回しと同じであることから分かるように、この洋杖は、個々の「話」が「離れるとも即くとも方の附かない」というこの作品の構造自体を暗喩する役割も果たしている。つまり、探偵行から一夜明けて、昨日の出来事が「洋杖の御蔭を蒙つてゐるのか、ゐないのかも判然しなかつた」と敬太郎が回顧する、その「判然」しない在り方と同じ形式で、複数の「話」が羅列されてゆくという意味で、洋杖を支点に生起する偶然性と、複数の「話」の「方の附かない」関係性とは同型なのである。洋杖を落とす場面は、テクストの内容と形式とが交叉する交点なのだ。

しかも、この、どちらとも「方の附かない」という表現は、出来事の連鎖に関わる箇所のみならず、テクストの各所で反復される。敬太郎自身の職探しの状況を表す「出来るやうな又出来ないやうな地位を、元程焦燥らない程度ながらも、先づ自分の遣るべき第一の義務として、根気に狩り歩るいてゐた」を始めとして、須永と千代子との関係を松本が叙する「離れる為に合ひ、合ふ為に離れると云つた風の気の毒な一対を形づくつてゐる」という表現、あるいは「敬太郎は帰り途に、今会つた田口と、是から会はうといふ松本と、夫から松本を待ち合はした例の恰好の可い女とを、合せたり離したりして頻りに其関係を考へた」、あるいは須永が自らを叙する「僕は意地の強い男で、又意地の弱い男なのである」といった、主要人物に関わる記述はもちろんのこと、敬太郎が電車で見かけた森本の元の妻かも

しれない女性を描写する、「偶然向ふ側に黄八丈の袢天で赤ん坊を負つた婦人が乗り合せてゐるのに気が付いた。（略）此黒人（くろうと）だか素人（しろうと）だか分らない女と、私生児だか普通の子だか怪しい赤ん坊と、…」という言い方、あるいはまた森本自身が言う「貴方のは位置がなくつて有る。僕のは位置が有つて無い。それ丈が違ふんです」など、一見本筋とは関係がない挿話に至るまで、テクストの隅々にまで「〜のようでもあり又〜かのようでもある」という、両義的に振幅する言い回しが張り巡らされている。それらの箇所に共通するのは、いずれも語り手が或る事態に関して判断を下す、解釈する箇所だということであり、つまり語られている事柄をめぐる真偽に関わる陳述が為される際に、両方とも真実であり、また両方とも真実ではない、という決定不能性が機能させられているのだ。洋杖を描写する表現は、各章の繋ぎ方の――即ちテクストの因果律に関わる――暗喩であるのみならず、物語られる内容の、個々の事態に関する語り手の解釈の枠組みを絶えず問い返すものとしてある。

　このように、形式／内容にわたって決定不能の文法が入れ子式に反復されるとき、問われるべきなのは、その文法が適用される対象の側の特性や共通点ではなく、むしろ、この、事実を確定することをつねに先送りする発話行為とは一体何なのか、なぜそれが形式／内容にわたって繰り返されねばならないのかということであろう。というのも、ここで語られている対象自体が、この特異な文法による分節化様式に基づいて見出される以上、この文法が対象の性質によって規定されているのではないことは明らかだからだ。

　注意すべきなのは、内容／形式の境界線上に位置するという特異な在り方をするこの洋杖に関して、そもそもなぜ洋杖という、それ自体はいかなる重要性も持ち得ないたんなる物品が――それは『虞美人草』の藤尾が持つ「金時計」のように、登場人物の欲望の構造を暗示する明確な象徴として導入されているわけではない――、かくも重要な役割を果たすに至るのかに関して、奇妙な拘泥があるということだ。すなわち、この洋杖が敬太郎の「所有」となるまでの経緯が――正確には、敬太郎の所有なのか、他人の所有なのか判然としないという状態に至るまでの経緯が――、奇妙な詳細さで叙述されている。この洋杖は、同じ下宿に住まう森本なる「漂浪者（ヴァガボンド）」から、彼が「失踪」する際に「記念（かたみ）」に譲り受けた形になっているのだが、敬太郎は、妙な行きがかりのために（下宿の主人「雷獣」に森本の失踪を手助けしたという嫌疑を掛けられているために）この洋杖を貰い受けることに関して躊躇せざるをえない立場にあり、そのことがこの洋杖を一種の強迫観念となしている。「実をいふと、彼は森本の手紙を受取つた当座、此洋杖を見るたびに、自分にも説明の出来ない妙な感じがしたので、成るべく眼を触れないやうに、出入の際視線を逸らした位である。所がさうすると今度はわざと見ない振をして傘入の傍を通るのが苦になつてきて、極めて軽微な程度ではあるけれども此変な洋杖におのづと祟られたと云ふ風になつて仕舞つた」。洋杖が敬太郎の「所有」に帰す経緯の曖昧さのために、後にそれが「自分の所有の様な又森本の

所有の様な…」という「方の附かない」状態を招くのだが、いったいなぜ、この洋杖のアイデンティティが、すなわちそれがどこから来てどこへ行くのかということがかくも奇妙な拘りをもって叙述されなければならないのか。特筆すべきなのは、「洋杖が二人を繋ぐ縁に立つてゐると解釈しても、或は二人の中を割く邪魔に挾まつてゐると見做しても、兎に角森本と此竹の棒の間には或る距離があつて、さう一足飛に片方から片方へ移る訳に行かなかったのに、今では夫が一つになつて、森本と云へば洋杖、洋杖と云へば森本といふ位劇しく敬太郎の頭を刺激するのである」という言い方に表れている、洋杖を仲立ちとした森本と敬太郎との関係を表す言い回しが、後の『心』において典型的に定着される、三角関係と取りあえず呼ばれうる関係性を表す文法と全く同型だということだ。つまり、「雑司ヶ谷にある誰だか分からない人の墓」が、「先生」と「私」との間の「自由な往来」を妨たげる「魔物」であると同時に「私」を「先生」に惹きつける縁にもなるという関係性、また、御嬢さん（静）がKと「私」の仲を裂くと同時に、妻としてKと「私」の「中間に立つて」、二人を「何処迄も結び付けて離さないやうにする」という、つねに三項の関連で関係性を把握する発想法が、敬太郎と森本との関係を描出する際にも適用されている。森本と敬太郎の間を繋ぐと同時に裂くこの小道具は、「私」と「先生」との間を裂くと同時につなぐKの「墓」と等価の位置を占めることによって――あるいはKと「私」との間を裂くと同時に結び付ける妻（静）と同じ位相に置かれることによって――、テクストの構造を背後から操る空虚な中心として作用している。

とはいえ、もちろんここでは、敬太郎と森本との間にもジラール的な欲望の三角形が潜在的にあるなどと指摘したいわけではなく、むしろ、事柄が三角関係に関わろうと物品の譲渡に関わろうと就職活動の合否に関わろうと、そのような事柄の性質の差異を無視して、隔たりと隣接、結び付けることと引き裂くことに関わる同じ構造が適用される（抽出される）のはなぜなのか、ということに着目したいのである。つまりこの「離れるとも即くとも方の附かない」という短篇連作形式を表す表現は、たんに『彼岸過迄』という特定のテクストの形式に留まらない、漱石の諸テクストに共通する観念連合の在り方を表しているのであり、『坑夫』における「小説」／「纏まらない事実」という二項対立、あるいは技巧か無意識か、故意か偶然かといった他者の真意をめぐる問いを通じて、つねに形を変えつつ一貫して追求される或る問題の所在を指し示している。

以上の如く、内容／形式にわたるあらゆる分節化の過程にわたって「離れるとも即くとも方の附かない」という言い回しが適用されるとき、テクストの目的論ということに関して『彼岸過迄』はどのようなスタンスを取っていることになるのか。

四　芥川龍之介における偶然性

その問いを問うために、ここで偶然性の小説への導入に関し

て、九鬼の図式を応用しながら、一見両極端にあると思われる二つの観点を整理しておきたい。単純化して言うならば、一方は何ものかの意図の表象としての――従って出来事には目的があるという印象を喚起する――偶然性、もう一方はその逆に物事にはいかなる意図（目的）もないという印象を喚起する偶然性である。それは、九鬼の言う「目的なき目的」という観点から導かれる。或る現象が目的無く（意図無く）生起するとき、それは偶然と呼ばれるが、しかし、生起した偶然が主体にとって重大な意味を持つとき、「偶然か故意かを弁別し難い」という印象を呈する。それが拡張されると「運命」観に至る。或る語りにおいて偶然性の概念がどう取り扱われているかを見ることで、その語りが出来事のなかに目的論を――偶然性の背後に意志を――認めているか否かを判定することができるだろう。

ところで九鬼における偶然性への執着は、「シェストフの言葉を借りて云へば、我々は「この世界の中に何等か統計学と「必然性」以外のものを発見しようといふ希望を棄てることを欲しない人たち」に属するのである」、「生に根ざす論理学にとつて、論理学の領域と体験の直接性との距離を或度まで減少させることは不可能ではないであらう」などとある通り、現象が自然科学的必然性によって完全に支配されているという事実を拒否するために偶然性の可能性に賭けるという、シェストフ的な反動という面があり、その意味で九鬼の偶然論は戸坂潤が批判する意味での「生の哲学」[10]としてあることは否めない。同年に出た横光利一の「純粋小説論」においても、偶然性を排斥してきた私小説風土を批判して、日常性そのものの論理が要求する偶然性を小説に再導入することを呼びかけるというスタンスで、偶然性の復権が説かれており[11]、また九鬼自身も中河与一「偶然文学論」等を引用している通り、偶然性への欲動は昭和十年代の「ニッポン・イデオロギー」の一つの現れとしてある。とはいえ、ここで指摘したいのは、横光によれば偶然性を排斥しているはずの、いわゆる通俗小説ではない「純文学」においても、偶然性は極めて有効に利用されているということだ。そのことは小説という表現形式における偶然性の問題が、たんに都合の良い箇所で人物同士がばったり出会うという手法を使うか否かといった場面展開の問題に限らない、その作品を理解可能にしている論理の在り方（その作品が暗黙に依拠している目的論）そのものの問題としてあることを示唆するだろう。

たとえば、芥川龍之介の『歯車』[12]において語られるのはいかなる偶然か。

『歯車』には、特に関連づける必要のないはずの無関係な事実の隣接や反復のなかに、つねに「偶然」の符合を見出してしまう「僕」が語られている。

> 「尤も天気の善い日には出ないさうです。（略）レエン・コオトを着た幽霊だつて云ふんです。」自動車はラツパを鳴らしながら、或停車場へ横付けになつた。（略）待合室のベンチにはレエン・コオトを着た男が一人ぼんやり外を眺めてゐた。（略）いつか電燈をともした汽車はやつと或郊外

の停車場へ着いた。（略）するとレエン・コオトを着た男が一人僕等の向うへ来て腰をおろした。僕はちよつと無気味になり、何か前に聞いた幽霊の話をT君に話したい心もちを感じた。（一　レエン・コオト）

けれども偶然僕の読んだ一行は忽ち僕を打ちのめした。「一番偉いツォイスの神でも復讐の神にはかなひません。……」僕はこの本屋の店を後ろに人ごみの中を歩いて行つた。いつか曲り出した僕の背中に絶えず僕をつけ狙つてゐる復讐の神を感じながら。……（一　復讐）

が、なぜかどの本も必ず文章か挿し画かの中に多少の針を隠してゐた。どの本も？――（略）僕はもう夜になつた日本橋通りを歩きながら、屠龍と云ふ言葉を考へつづけた。（略）僕は突然何ものかの僕に敵意を持つてゐるのを感じ、電車線路の向うにある或カッフェへ避難することにした。（三　夜）

が、偶然（？）彼の言つた『罪と罰』と云ふ言葉に感動し、この本を貸して貰つた上、前のホテルへ帰ることにした。（略）しかし偶然開いた頁は「カラマゾフ兄弟」の一節だつた。（略）僕はこの製本屋の綴ぢ違へに、――その又綴ぢ違へた頁を開いたことに運命の指の動いてゐるのを感じ、やむを得ずそこを読んで行つた。（五　赤光）

が、その二三町を通るうちに丁度半面だけ黒い犬は四度も僕の側を通つて行つた。僕は横町を曲りながら、ブラック・アンド・ホワイトのウィスキイを思ひ出した。のみならず今のストリントベルグのタイも黒と白だつたのを思ひ出した。それは僕にはどうしても偶然であるとは考へられなかつた。若し偶然でないとすれば、――僕は頭だけ歩いてゐるやうに感じ、ちよつと往来に立ち止まつた。（六　飛行機）

ここに描かれているのは、知人の「結婚披露式」に向かう車中で「レエン・コオトを着た幽霊」の話を聞いた直後に、停車場の待合室でレエン・コオトを着た男を目撃し、夜に入って到着した郊外の停車場で再びレエン・コオトを着た男に遭遇するという現象のなかに、また、「復讐の神」や悪魔に関する頁を、しかも綴じ違えた頁をふと開いてしまうという自らの行為のなかに、あるいは先程飲んだウィスキーのBlack and Whiteという銘柄と同じ白と黒の柄のタイを付けた「ストリントベルグ」という名の「被害妄想狂の瑞典人（スウェデン）」や、「丁度半面だけ黒い犬」と四度も擦れ違うという出来事のなかに、その都度「偶然」を見出してしまう「僕」の姿である。注意すべきなのは、ここで語られている偶然がつねに、「それは僕にはどうしても偶然であるとは考へられなかつた。若し偶然でないとすれば、――」という形で顕れるということだ。「僕」にとっては偶然とは決

して偶然に起こるのではなく、むしろそれが偶然ではありえないということを告知するためにこそ生起するのであり、さらに言うならば、「僕」のあらゆる行動を悉く捕捉している「何ものか」の存在を暗示するために――そしてその「何ものか」の視線を逃れる術はないということを「僕」に知らしめるために――顕れるのである[13]。それは行く先々で顕れる「火の燃える」光景として、あるいは書籍の中に隠された「針」として、また「何か僕の目に見えないもの」の「囁き」として「僕」を待ち受け、「僕」に対し、いついかなる時と場所においても「僕」を見張り待ち伏せている視線の存在を仄めかす。そして「結婚披露式の晩餐」を終えてホテルに帰り「ロツビイへ出る隅」で一瞬くつろぎかけた「僕」は、三度レエン・コオトを目撃するという「偶然」に遭遇し、ここにも既に「何ものか」が先回りしていたことを悟るのである。

　するとロツビイへ出る隅に緑いろの笠をかけた、背の高いスタンドの電燈が一つ硝子戸に鮮かに映つてゐた。それは何か僕の心に平和な感じを与へるものだつた。僕はその前の椅子に坐り、いろいろのことを考へてゐた。が、そこにも五分とは坐つてゐる訳には行かなかつた。レエン・コオトは今度も亦僕の横にあつた長椅子の背中に如何にもだらりと脱ぎかけてあつた。（一　レエン・コオト）

その直後、姉の夫が「季節に縁のないレエン・コオト」を着たまま鉄道自殺したとの報知を受けた「僕」にとって、もはや何一つたんなる偶然ではありえない。轢死した姉の夫の顔が口髭のみを僅かに残して肉塊となったということを告げられた後、死後の始末に立ち寄った姉の家で、その夫の肖像画の「口髭だけはなぜかぼんやりして」いることに気が付いた「僕」は姉に問いかける。《「唯あの肖像画は口のまはりだけ、……」「髭だけ妙に薄いやうでせう。」僕の見たものは錯覚ではなかつた。しかし錯覚ではないとすれば、――》。「僕」は傍線部以降を顕在的には語らないが、それは暗黙に「死は姉の夫に迫つてゐたやうに僕にも迫つてゐるらしかつた」ということを暗示する「偶然」なのである。さらに類似の「偶然」が繰り返され、あたかも凶事を告知する「何ものか」の視線から身を隠そうとするかのように「僕」は「電車線路の向こうにあるカッフェへ避難」するが、しかし「薔薇色の壁に何か平和に近いものを感じ」るのも束の間、すぐに次の「偶然」が「僕」を見舞う。《けれども僕は暫らくの後、僕の左の壁にかけたナポレオンの肖像画を見つけ、そろそろ又不安を感じ出した。ナポレオンはまだ学生だつた時、彼の地理のノオト・ブツクの最後に「セエント・ヘレナ、小さい島」と記してゐた。それは或は僕等の言ふやうに偶然だつたかも知れなかつた。しかしナポレオン自身にさへ恐怖を呼び起したのは確かだつた》。「何ものか」の「敵意」は、屋内だろうと薔薇色の壁紙の傍だろうと逃げ隠れすることはできないと告知するかのように、行く先々にレエン・コオトを配置し、書物の中に暗合を潜ませ、また「爬虫類の皮膚のやうに

湿つ」た手をもつ彫刻家の姿を借りて「僕」を「探偵」することによって、いかなる場所へ「避難」しようと監視の目が届いているということを仄めかす。疲弊した「僕」は最後に再び妻子のもとに帰るが、その道すがら、死（la mort）の象徴である「鼹鼠（Mole）の死骸」を小道の上に見出す。

　しかしこの小みちのまん中にも腐つた鼹鼠の死骸が一つ腹を上にして転がつてゐた。何ものかの僕を狙つてゐることは一足毎に僕を不安にし出した。そこへ半透明な歯車も一つづつ僕の視野を遮り出した。（六　飛行機）

「愈最後の時の近づいたことを恐れながら」、自らの書斎に戻った「僕」は、何かに怯えて梯子段を登ってきた妻の、「唯何だかお父さんが死んでしまひさうな気がしたものですから。…」という言葉に接して、「復讐」の手が既に家族のもとにまで届いていることを悟り、「それは僕の一生の中でも最も恐しい経験だつた」と書きつけ、既に事態を終わりから眺めている。

ここには、いかなる意味も読み込む必要のないたんなる偶然のなかに何らかの「暗合」や「運命の冷笑」や「復讐」といった〝意味〟を見出してしまう「僕」が描かれている。『彼岸過迄』の敬太郎は偶然性を追跡する「探偵」であったが、『歯車』の「僕」は逆に偶然性によって尾行されている。互いに無関係な諸要素を偶然の一致という形で結び付けることによって偶然性そのものを構成しているのは、当の「僕」自身にほかならないにもかかわらず、あたかもそれは「僕」にとって外的な超越的な何かが意図的に操作しているかのように現象するのである。「僕」にとって「偶然」とは、まさに超自然的な「何ものか」が「僕」の生を操っているということの証しなのだ。

けれどもなぜ、偶然の出来事こそがその出来事が決して偶然ではないということの証しとして機能しうるのか。それは、たんなる自然必然性によっては起こるはずのない一致や反復に遭遇するとき、そこに何らかの〝意図〟の表象を紛れ込ませることができるからにほかならない。それは九鬼が、以下の引用で芥川と全く同じ言い回しで記述している通り、「目的なき目的」を喚起する「故意か偶然か弁別し難い」ケースに該当するだろう。《「目的なき目的」の強調の結果、偶然は偶然でない如き相を呈して、自己否定の志向的構造を取るやうになる》。《「偶然にして偶然でない」とか「偶然とは思へない」とかいふのは、「目的なき――目的」の下肢の強調の余り、上肢が殆ど響を失つた形である》。そうであればこそ、「それは僕にはどうしても偶然であるとは考へられなかつた。若し偶然でないとすれば、――」とか、「しかし錯覚ではないとすれば、――」というふうに、後半を伏せ字にして、偶然でないとすれば、間違いなくやはり「何ものか」が「僕」をつけ狙っているということの証拠なのだ、という暗示の効果をもたらすことができるのだ。

そして、そのような偶然性は、右の諸例の如く「僕」の未来を予告し得る超越的存在の徴であるからこそ、それを被る主体にとっては抵抗も変更もできない「運命」として感受される。

芥川の遺稿において偶然性と運命とがつねに一緒に――結局は同じ意味として――出てくるのはそのためであり[14]、それらの偶然は「僕」が実際に自殺するということをあらかじめ先取りして示し、従って芥川の「僕」は、未だ自らが辿ってさえいない運命を、あたかも既に確定した運命であるかのように辿るという奇妙な経路を描くことになる。それに従うことを止めさえすればそれはたちどころに運命ではなくなるはずであるにもかかわらず――というのもそれを運命にしているのは「僕」自身にほかならないのだから――、あたかも決して逆らい得ない意志に誘導されるかのようにその遺稿は進むのである。

その意味で最後に芥川が『西方の人』で「クリスト」に示した関心は、恐らくは基督自身が既にあらかじめ定められた――既に預言者たちによって書き留められた――終わりに向かって進む者であり、しかもその確定された終わりに至る航路を全て「知り悉してゐ」る者としてそこに向かうという自分自身とのアナロジーのためにほかならないだろう。つまり芥川（の語り手）が、「クリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出来ない」と書くのは、自らの意志で斥けることもできた「杯」を結局は斥けなかったという、その「運命」を受け入れる態度に関してであり、つまり未だ〝成就〟していない変更可能な未来を、既に終わったものであるかのように眺めるという「末期の目」（「或旧友へ送る手記」）によるのではないか。「ゲツセマネの橄欖はゴルゴダの十字架よりも悲壮である。クリストは死力を揮ひながら、そこに彼自身とも、――彼自身の中の聖霊とも戦はうとした。ゴルゴダの十字架は彼の上に次第に影を落さうとしてゐる。彼はこの事実を知り悉してゐた。（略）クリストの祈りは今日でも我々に迫る力を持つてゐる。――「わが父よ、若し出来るものならば、この杯をわたしからお離し下さい。けれども仕かたはないと仰有るならば、どうか御心のままになすつて下さい。」あらゆるクリストは人気のない夜中に必ずかう祈つてゐる」（『西方の人』28 イエルサレム[15]）。

以上の通り芥川的な偶然性は、偶然とは思えないという形式で何ものかの〝意図〟の表象を喚起するものとしてあった。しかしながらこのような、現象という形式を仮に纏って顕れる「運命」としての偶然性は、目的論という観点からみるならば、或る種の予定調和のなかにあることは否めない。というのも、「運命の指の動いている」証としての偶然性は、先程見た、九鬼周造の、偶然性が必然性と「異種結合」して「必然―偶然者」と化すという公式に則って、結局は、自らの反対物である絶対的な必然性に転換するからである。（「運命としての偶然性は、必然性との異種結合によって、「必然―偶然者」の構造を示し、超越的威力を以て厳として人間の全存在性に臨むのである」）。すなわち芥川の偶然性は、「何ものか」が定めた「運命」からは決して逃れられないという、語り手を狂気に導くほど深刻な現れ方を取りつつも、或るあらかじめ先取りされた終わりに向かって全てが設計＝決定されているという意味で、形式的には安定している。この偶然性は、機能としては結局プロットの目的論的整合性に奉仕しているにすぎないのであり、つまり全ての事態が語り手の主観（一

元的な世界観）に還元されているということを示すものでしかない。

とはいえ、芥川の語り手にとっては、偶然性という形で現象の自然な因果律が改竄されているかのように見えるため、それは主体にとって強迫的な他者性を帯びたものとして現象するのだ。

五　志賀直哉における偶然性

それに対して、志賀直哉の『城の崎にて』[16]は、芥川とは逆に、そこにいかなる意図も関与していないという意味での真の偶然性を提示しているかにみえる。それはいかなる目的論にも回収され得ない、まさに非意味としての偶然性であるかに見える。

もう動かない。蠑螈（いもり）は死んで了つた。自分は飛んだ事をしたと思つた。虫を殺す事をよくする自分であるが、其気が全くないのに殺して了つたのは自分に妙な嫌な気をさした。素より自分の仕た事ではあつたが如何にも偶然だつた。蠑螈にとつては全く不意な死であつた。自分は暫く其処に踞んでゐた。蠑螈と自分だけになつたやうな心持がして蠑螈の身に自分がなつて其心持を感じた。可哀想に思ふと同時に、生き物の淋しさを一緒に感じた。自分は偶然に死ななかつた。蠑螈は偶然に死んだ。（略）そして死ななかつた自分は今かうして歩いてゐる。さう思つた。自分はそれに対し、感謝しなければ済まぬやうな気もした。然し実際喜びの感じは湧き上つては来なかつた。生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは両極ではなかつた。それ程に差はないやうな気がした。

傍らにあった「小鞠程の石」でイモリをおどかして水に入れようと思ったところ、石を命中させてしまい殺してしまったことについて、「素より自分の仕た事ではあつたが如何にも偶然だつた」と「自分」は証言する。ここで捉えられているのは、投げられた石が描く弧線と、渓流の岩の上に佇むイモリの位置とが交わるという「二元の邂逅」に関して、いかなる意志の関与も見出すことが出来ないという事態である。そこには或る意味で誰もいなかったにもかかわらず、イモリの死が帰結してしまったのである。自らが行った行為について「自分に妙な嫌な気をさした」とあたかも自分が受動的に被った現象であるかのように書かれているという意味で――つまり過失という観念が、あるいは無意識の欲望という概念が決定的に欠けているという意味で――、志賀の資質を示す一節だとも言えるが、ともかくここでは、或る結果に関して、それを目指したいかなる動機も原因も見出され得ないという事態を指して偶然性の概念が適用されている。

ここには、芥川とは逆に、偶然性ということを、むしろ意図の不在の証しとして捉える視点が提示されているといえる。こ

の、昏くなりかけた流れの傍らでの偶然性は、その行為に関していかなる当事者（主体）も不在であることをこそ指している。『范の犯罪』における、主体の意図の不確定性といった標語に纏められ得るであろう、ナイフの僅かな傾きが示す偶然性とも異なり、イモリの死は、そこからいかなる教訓も引き出し得ない偶然性、つまり内省によって自己欺瞞を摘出することもできず、さりとて自己を超えた超越者を啓示されることもない孤独な偶然性であるかのように見える。ここには、行為者の概念は行為から投影的に生ずる余剰だとするような視点があるといえるだろう。

このような、偶然性の背後を見ようとしない判断様式が、「自分は偶然に死ななかつた。蠑螈は偶然に死んだ」という書き方に窺われる、最終的に「自分」やイモリの生死を左右している超越的な主体は存在しない、という判断につながる。つまり「感謝しなければ済まぬやうな気もした。然し実際喜びの感じは湧き上つては来なかつた」とある通り、もし仮にここで「感謝」するとすればそれは、我々の「運命」を目的論的に左右する意志を暗黙に前提することになるだろうが、しかし「喜び」の代わりに「死に対する親しみ」が起こり、生と死とに「それ程に差はないやうな気がした」と書くことで、感謝すべき対象の不在を示唆し、「何ものか」による選択ではなくて偶然しか存在しないことを確認する語り方となっている。「自分は死ぬ筈だつたのを助かった、何かが自分を殺さなかつた、自分には仕なければならぬ仕事があるのだ、（略）実は自分もさういふ風に危ふかつた出来事を感じたかつた。そんな気もした。然し妙に自分の心は静まつて了つた」という言葉が、主体に使命を与えるような「何ものか」を想定する立場への拒否を裏書きしている。小動物たちが死に、代わりに「自分」が生き残ったことは、「自分」に何かを告げるために天が設定したものなのではなく、たんに偶然なのである[17]。

しかし重要なのは、だからといって志賀の偶然性が、芥川の偶然性が結局は九鬼的な必然性の擬装にすぎなかったのとは一線を画して、二元の交叉における必然性の無さに踏みとどまり、「運命」（絶対的な必然性）に還元されることを回避しうるかというと全くそうではないということだ。というのも、渓流での二元の交叉がその交点に垣間見せる、イモリと「自分」とを取り替え可能と見なすような無差別性は、それ自体が既に、九鬼周造が自らの偶然論の最終形態として掲げる「形而上的偶然性（離接的偶然性）」、即ち「仏の本願」[18]につながる、無の境地を体現する偶然概念にほかならないからである。

というのも、右のような偶然観が――「自分」が生き残りイモリが死んだことにはいかなる意味もないという死生観が――どのような前提によって可能にされているかというと、「蠑螈の身に自分がなつて其心持を感じた」という表現に表されている通り、イモリと自分との立場を交換可能だとする立場、すなわち他者（イモリ）の立場に立って考えるということを可能と見なす立場によってこそ可能にされていると考えられるからだ。すなわち、中村光夫が「ほとんど蠑螈が人間になり人間が

蝾螈になつたやうな錯覚に、自然と読者を導きます」「これほど自我の意識をさつぱり手放して、対象に没入したものは他に見られない」「蜂と鼠、蝾螈と人間とが、同じ法則に、同じく脆い生を託してゐる事実の素直な受容」[19]と賞讃した通り、自己への執着を「さつぱり」去ることによって他者の「心持」と同一化し得るとする立場、自と他とは究極的には一なるものであると見なす立場がこのような偶然観を可能にする。それは九鬼の偶然論が「離接的偶然」の段階にいたって、「間柄」という語を使いながら和辻哲郎と同じ「自他不二」性を語り出すことと呼応している。「偶然性の実践的内面化は具体的全体に於ける無数の部分と部分との間柄の自覚にほかならない」。

つまり、「自分」とイモリとが互いに取り替え可能であるためには、何ものかの媒介によってそれらが互いに同一的であることが保証される必要があり、従って、あらかじめ全ての離接肢を自らの中に包摂した「一なるもの」としての全体性が想定されねばならないのである。「離接肢は離接的諸可能性の全体を予想してゐる。然るに諸可能性の全体といふことは究極的には形而上的絶対者の概念へ導く。絶対者は絶対者なるが故に絶対的に一と考へられる。また絶対的に一なるが故に絶対的に必然と思惟される。この絶対的必然を形而上的必然と呼ぶことができる」（九鬼、三―十三）。個々の部分（離接肢）としての「自分」とイモリとは、その全体性から分離＝派生することによって個となり、そして個としての「自分」は、「蝾螈の身に自分がなつて…生き物の淋しさを一緒に感じた」という内省を経て自己の個を「否定」（止揚）することによって、全体性へ回帰する。すなわち志賀の偶然性は、「空」としての「全体性」に包容された「部分」にすぎないのであり、あらかじめ全体性（絶対的必然性）に回帰すべきものとして設定されているという意味で、和辻倫理学の弁証法と同じ構造の中にある。志賀の偶然性もまた、芥川の偶然性同様に、絶対的な予定調和の仮の姿でしかなかったのである。石が描く放物線と岩に佇むイモリとの二元の交叉という、その背後に何ものも暗示しないはずの交点は、やはり「自他不二」という深層を隠していたのだ。

そのように見てくるなら、この渓流の脇で志賀が展開してみせる無の石ころの放擲は、偶然性という主題を利用しての、一連の「東洋的」な意匠をまとう神秘主義的言説の類型としてあることが見えてくるだろう。つまりこの石ころの一振りは、あたかも漱石の『行人』に引用される、「すると其石の一つが竹藪に中つて戛然と鳴りました。彼は此朗かな響を聞いて、はつと悟つたさうです」という禅僧「香厳」のエピソードのごとく、「石はこツといつてから流れに落ちた」という、渓流の岩に当たって鳴る石の音を聞いて「偶然」を悟るという意味で、禅的悟りの話形を踏襲しているにすぎないのである。それは、他でもあり得たが敢えてこれが選ばれたという意味での「運命」の遊戯として、一見賭けの感覚を伴いながらも、九鬼の言う賽ころの一振りと同じく、結局は東洋的無を体現する「必然―偶然者」に回収される[20]。それはまた、田辺元が、マラルメの『双賽一擲』に関して、「マラルメの偶然は禅の公案と解しても不

当ではあるまい」としつつ、「絶対偶然は本質的に（略）行為の弁証法に依つて成立するものであるからには、それは同一律矛盾律に依つて一面的に規定せられるものではあり得ぬ。飽くまで弁証法的二重的に偶然であると共に偶然でなく、偶然でないと共に偶然であるのでなければならない。死は必然であると同時に偶然であり、偶然であると同時に必然と覚悟せられるべきものなのである」（七　イジチュールの絶体絶命）「存在の根柢が絶対無であるといふ自覚こそ、まさに絶対偶然の愛（私のいはゆる無即愛）による転換であつて、それの原理的方法が弁証法なのである」（九　生死相関自覚の逆説）[21]と書く如く、あらかじめ「絶対無」という目が出ることが約束された賽ころのひと一振りというものを、小石で代行してみせたという意味で、実はあまりにも演出的、人為的であり、すなわちあまりにも偶然性が廃棄されている。その意味で、そこには何一つ主体を「突き放す」（坂口安吾）ものが無い。却って芥川が記述した偶然性の方が、「運命の冷笑」といった紋切り型の文学的修辞で表されるものでありながら、人がそれはたんなる自意識の投影にすぎないと知りつつも、そこから身をかわすことができずに結局その定めに従ってしまうという意味で、はるかに作為性を免れているといえるだろう。芥川の偶然性は、生と死との間に「それ程に差はないやうな気が」することなど決してありえない、「光のない暗（やみ）」（『歯車』）としての偶然性である。

とはいえ、芥川と志賀における偶然観は対極に見えながらも、いずれも偶然を「必然―偶然者」に解消されるべきものとして導入することで、結果的に偶然性を廃棄しているという意味では共通していた。そしてこの場合、彼らのテクストが、形式的にみて「「話」らしい話のない小説」[22]なのかそれとも「「話」のある小説」なのかということは、それらの表層的な「話」の背後に（あるいは「話」の不在の背後に）何らかの同一性が想定されているかどうか、語り手の世界観によって世界が統御されているか否かということとは関わりがない。芥川自身、志賀の「「話」らしい話のない」小説の「東洋的伝統の上に立つた詩的精神」を「僕に最も及び難い特色」としたが（『文芸的な、余りに文芸的な』「五　志賀直哉氏」）、だからといって両者が全く別の立場に立っているわけではない。むしろ両者は或る部分を共有しているからこそ完全に対立できたのだ。

さらにここに漱石の『門』を付け加えるなら、宗助における偶然性も超越者の暗号としてあったという意味で、右の分類でゆくなら芥川のパターンに属するだろう。形式、内容ともに全く異なるにもかかわらず、偶然の出来事が「運命」を啓示し、その背後に「何ものか」の視線を喚起するというメカニズムを両者は共有している。要するに、「偶然な出来事」が主人公の参禅に結びつくという意味で偶然性が極めて大きな主題となっているにもかかわらず、『門』の偶然にも偶然性は存在しないのである。

六　『彼岸過迄』における偶然性

だが今挙げた二つの対極的な（表裏一体の）偶然性とは異なる、双方から距離を取る偶然性として『彼岸過迄』の偶然性があるのではないだろうか。なぜなら、志賀や芥川の偶然が同一性に回収されるのに対し、敬太郎の洋杖はそれを免れているからだ。ではそれはどういう意味でなのか。

注意すべきなのは、右の諸例と異なり、『彼岸過迄』における偶然性は、そもそもそれが偶然性という仮の姿をまとって顕れた何ものかの現前なのか、それとも文字通りの（たんなる自然必然性としての）偶然なのかを決して判定できない形でしかあらわれないということだ。というのも、「探偵」行為が終わってから敬太郎自身が、

> 今朝は蛇の頭に夫程の意味がないやうにも思はれた。ことに是から田口に逢つて、探偵の結果を報告しなければならないと云ふ実際問題の方が頭に浮いて来ると、尚更さういふ感じが深くなつた。（略）いざ其活動の結果を、普通の人間が処世上に利用出来る様に、筋の立つた報告に纏める段になると、自分の引き受けた仕事は成効してゐるのか失敗してゐるのか殆んど分らなかつた。従つて洋杖の御蔭を蒙つてゐるのか、ゐないのかも判然しなかつた。床の中で前後を繰り返した敬太郎には、正しく其御蔭を蒙つてゐるらしくも見えた。又決して其御蔭を蒙つてゐない様にも思はれた。（報告　一）

と回顧することから分かる通り、敬太郎においては、洋杖の偶然が占い婆さんの「予言」の成就なのか――占い婆さんの「助言」は本当に「予言」だったのか――、それともたんにそうである〝かのように〟みえるだけなのかが不明だということ自体が問題となっているからだ。つまり、結局のところこの洋杖が或る方角を指し示している（かのように見える）ことをもって、現象には〝背後〟があるということの証拠と見なしてよいのか否かを決定しえないということこそ、敬太郎が遭遇する偶然性の在り方なのだ。

しかも、この、意味しているのかいないのか分からないという決定不能性は、実際には、一夜明けての回顧をまつまでもなく、洋杖の偶然性を目撃する瞬間にも既に働いていた。「彼は其時蛇の頭が偶然東向に倒れてゐるのに気が付いた。さうして其頭の恰好を何とはなしに、方角を教える指（フィンガー、ポスト）標の様に感じた」。ここに、「何とはなしに…」「〜の様に感じた」という留保が語り手によって記述されていることから分かるように、敬太郎が東の停留所を選択したのは、洋杖が方角を意味している「様に感じた」からにすぎないのであり、そのことが、そこで見出された偶然性自体が一種の恣意的な、敬太郎自身によって構成されたものにすぎないことを既に暗示している。つまりここには、芥川や志賀に見られたような、それが何を意味しているにせよともかく偶然としか呼びようのないものが客観的に実在するという性格が著しく欠けているのだ。このように偶然性が決定不能性に留め置かれることは何を意味するのか。

芥川の「僕」と志賀の「自分」において、偶然性とはその二元の交叉の内奥に何かを隠すものであり、隠すことによってその〝深層〟を仄めかすものとしてあった（隠すことで結果的に隠されたものを捏造する場としてあった）。要するに偶然性とは、それが「何ものか」という顕在的な形を取るにせよ、あるいは「空」というふうに非人称的に表象されるにせよ、ともかくその二元の交点において或る特定の意義の伝達が意図されているという意味で、そこには意図する〝主体〟が想定されているのである。それは選ばれた受け手によってのみ解読されうるメッセージなのであり、だからこそ芥川の「僕」においては、「…殊に往来の人々の罪などと云ふものを知らないやうに軽快に歩いてゐるのは不快だつた」「僕はもう一度人目に見えない苦しみの中に落ちこむのを恐れ…」、「僕は誰にもわからない疑問を解かうとあせりながら、…」といった選民意識につながり、また志賀の「自分」においても「山の手線の電車に跳飛ばされて」九死に一生を得るという特権的な体験が必要とされる。

だが、それらの、偶然性とは「何ものか」の意志の透明な代理であるとする立場に対し、敬太郎においては、洋杖の方角が何かを「指標」しているのか否か自体が攪乱されることで、この洋杖がそれ自身とは別の何かを指し示すための「記号」なのか、それとも指し示す、意味するという機能とは関係のない、ただの竹の棒きれにすぎないのかがついに定かではないという経緯となっている。すなわち、洋杖の偶然が「予言」の成就なのか否かを問う以前に、そもそもそこに偶然と呼ばれうるものが構成されていると言えるのかが疑われているのだ。そのことで、地面に転がった洋杖は、何かを隠蔽することによってその内部へ誘うものとしてではなく――従ってそれ自体の内奥に何かを秘蔵している外皮なのではなく――、むしろいかなる背後をも持たぬ表層となる。その交点から「罪」とか「無」といった内奥性へ降りて行くことが出来る扉なのではなく、何かを指差しているかどうかさえ定かでない、地面に描かれたたんなる図形となる。

この観点から見るならば、芥川の「僕」や志賀の「自分」とは、偶然性という出来事に関して、何かしら明証的な、それ自身以外ではありえない〝真理〟としての特定の意義が現前するかのように語ることによって、個々の出来事にまつわる意義作用の偶然性を抑圧していることになるだろう。偶然性を、何ものかが特定の真意を語るために設置した装置と見なすことにより、〜かのようにも見えまた…という、意味することから拭い去りがたい振幅をそれらの偶然観は隠蔽してゆくのである。

だが『彼岸過迄』においては、「自分の引き受けた仕事は成効してゐるのか失敗してゐるのか殆んど分らな」いという敬太郎の疑いにおいて、芥川や志賀あるいは『門』に代表される、偶然性を直接的な意図の現前と見なす立場が相対化されてゆく。それは、意味するものとされるものとの解消し得ない断絶を露呈させることで、偶然とは、見る側が事態をどう分節化するのかという解釈の枠組みによって規定されているものにすぎないことを露わにする。

このような偶然性への距離感の変更は、偶然性を、その背後への通路として捉えるのではなく、この洋杖が偶然として現れるのはいかなる条件においてなのかを示す方向へ向かうことを意味するだろう。つまり、洋杖が倒れたという現象が「偶然」と化す経緯を克明に記述することで――洋杖が意味する偶然と化すのはまさに敬太郎がこの洋杖に何らかの「予知」の効果を期待していたからにすぎないという背景を描くことによって――、偶然が偶然として構成されるための仕掛けを露わにしてゆく。そのことにより、偶然に背後があるのか否かを問う以前に、そこに「偶然」と呼ばれるべき現象が本当に生起していたのかということ自体が――偶然という事実を客観的にそこに在るとみなす確定記述そのものが――、問い返されているといえるだろう。かくして、この偶然に意味があるのかそれともたんなる偶然（自然必然性）なのかという選択肢自体が無効化され、問題の焦点となっている偶然性そのものが解消される。

七　語る主体の複数化と敬太郎の鼓膜

このように、偶然性が偶然性として現れる条件を明らかにすることによって、二元の交叉としての偶然性における、その交叉する交点とは結局一主体の主観（の統覚）の別名にほかならないということが明らかになるだろう。つまり何ら交叉する必然性のない二系列が出会うことは、まさに両者を統一する一主観においてのみ可能なのであり、それは一主観の同一性にこそその照準を定めているのであり、つまりはその一主観によって世界が意味づけられているという独我論的状況の異名にすぎないのである。

だが敬太郎の洋杖においては、偶然性は、むしろ複数の観点から相対化されてゆく。二元の交叉が一主観に収斂してゆくのではなく、むしろ複数の主観の交叉こそが描かれる。

そのことが、まさに田口の「悪戯」という設定に端的にあらわれている。すなわち、敬太郎が数々の推理を経て選び取った貴重な「邂逅」が、実は田口という「比類のない巧妙な手際を有つた作者」によって仕組まれた「悪戯」でしかなかったことが明かされることで、偶然性の脱神秘化が行われる。「敬太郎は、田口の義弟に当る松本が、叔父といふ資格で、彼の娘と時間を極めて停留所で待ち合はした上、ある料理店で会食したといふ事実を、世間の出来事のうちで最も平凡を極めたものゝ一つの様に見た。それを込み入つた文（あや）でも隠してゐるやうに、一生懸命に自分の燃やした陽炎を散らつかせながら、後を追掛て歩いたのが、左も左も馬鹿馬鹿しくなつて来た」。何かしら超越的な「意図」が働いているのではないかという疑問を喚起する「二元の邂逅」が、実は「暗い中で自分を操つてゐる運命の糸」の神意によってではなく、「篦棒（べらぼう）」な実業家田口の人為でしかなかったことが明かされることによって、敬太郎にとっての都市の一瞬の裏面の光景が、「遺伝的に平凡を忌む浪漫趣味（ロマンチック）の青年」の「殆んど冒険とも探検とも名付けやうのない児戯」にすぎなかったことが明かされる。つまり予言が成就したか否

かなどと問う以前に、ここで起こっている出来事は人為的な悪戯としての必然的な展開を辿っているにすぎないのである。この出来事は須永からみれば「内幸町の叔父が人を担ぐ位の事は、母から聞いて知つて居る筈だのにと窘なめる事もあつた」「仕舞には、君があんまり色気が有り過ぎるからだと調戯ひ出した」という「窘なめ」「調戯ひ」の対象となる。さらに千代子とその妹の百代子にとっては「一体田川さんの洋杖つて、何んな洋杖なの。妾一寸見たいわ。（略）ぢや旗日に丈突いて出るの」という好奇の対象として相対化される。

このような、一事態の複数的な解釈という観点は、必然的に、語る視点そのものの複数化を要求するだろう。敬太郎の探偵場面において三人称で語る語り手によってその姿態を克明に描写されていた千代子は、四章の「雨の降る日」では、形式的には三人称だが、しかし名目上は自ら語る主体として、松本の娘宵子の死という「雛祭の宵に生れた女の子の運命」を語り、さらに「須永の話」では、「偶然高木の名前を口にした」須永に対し「貴方は卑怯だ」という一句を射る一登場人物として現れる。また、三章までの非人称の語り手によって「至つて退嬰主義の男」とされた須永も、「須永の話」で自ら一人称の自伝体で語る主人公として現れ、後に「手紙」が引用されもする。さらに敬太郎が尋ねてゆく「高等遊民」松本も、「松本の話」において須永と千代子の関係について一人称で解説する語り手となる。最後に再び最初の非人称の語り手が現れて、敬太郎の視点に回帰する。このように、たんに複数的というよりも、むしろいかなる視点によっても事態が占有されえないということを――或る一つの主観の外部は客観的普遍的事実なのではなくまた別の主観による世界にすぎないということを――示す『彼岸過迄』の語りは、偶然性という現象を、一主観によって一義的に構成された事実という資格で確定的に記述することは不可能だという認識を通じて、必然的に要請されるものなのだ。つまり、漱石の「離れるとも即くとも方の附かない短篇が続く丈の事だらうとは予想できる」という構想は、このような偶然性の相対化から必然的に要求される。

ここに至って「自分の様な又他人の様な、長い様な又短い様な…」という洋杖を指す言い回しが、漱石の構想の言葉を反復することの意義も分かってくる。つまりこの洋杖が物語内容の一要素にすぎないと同時に短篇連作という形式を操作する小道具でもあるということは、この洋杖（を手にした敬太郎）が、偶然性という出来事に「囚われる」と同時に、その偶然性という出来事自体を相対化してゆくという、二重の機能を担っていることを示しているのだ。それは言い換えるなら、敬太郎という登場人物が、須永をめぐる「話」を聞き出すための副主人公にすぎないにもかかわらず、この『彼岸過迄』というテクストの、「個々の短篇を重ねた末に、其の個々の短篇が相合して一長篇を構成する」という構想における「相合」の役割を担うのが、全ての「話」を聞く敬太郎の「鼓膜の働らき」[23]以外に存在しないということと同じである。敬太郎の鼓膜は、互いに因果関係で結ばれていない個々の「話」を、あたかも繋がっているか

のように見せ掛ける仮の統覚として働いている。聞き役によってのみ統合されるという『彼岸過迄』の設定は、出来事の連鎖をつなぐものが――あるいは自己の同一性を保証するものがと言い換えてもよいが――、その出来事や意識内容の中には存在しないという、『坑夫』以来のヒューム的問題意識を、より暗喩的な方法で、テクストの形式そのものによって体現しているといえるだろう。

その意味で、洋杖を形容する「半ば蛇の口に隠れ、半ば蛇の口から現はれて、呑み尽されもせず、逃れ切りもせず、出るとも這入るとも方の付ない状態…」という表現は、まさに「物語」の中に「出るとも這入るとも方の付ない」という、敬太郎の超越論的な在り方を暗喩している。最後に再び非人称の語り手によって、「敬太郎の冒険は物語に始まつて物語に終つた。（略）けれども彼は遂に其中に這入れなかつたのである。其所が彼に物足らない所で、同時に彼の仕合せな所である。彼は物足らない意味で蛇の頭を呪ひ、仕合せな意味で蛇の頭を祝した」という総括が述べられる通り、敬太郎は、遂に物語の中に参加できないたんなる「受話器」でしかないが[24]、しかしその中に「這入る」べき世界はただそれらが語られる仕方によってしか、つまり敬太郎という「受話器」を通してしか現れ得ないことを示すことで、これらの「物語」から「距離」を取り、その配列を決定する主導権を握るという、両義的な立場を可能にするのである。

八　匿名の女を眺める敬太郎

以上のことを踏まえて停留所での千代子の描写に戻るなら、なぜあれほど執拗に千代子の変幻自在さが微に入り細に入り描写されていたかも分かるだろう。敬太郎は、内容／形式の境界を自在に往還する能力を体現する洋杖の導きを受けて、「処女か細君か」不明な或る若い女を夕暮れの街を背景に注視することになるのだが、この、洋杖が結局意味しているのかいないのか分からないという、どっちつかずの両義的曖昧さが、まさに、敬太郎がみる千代子の変幻自在さという形で反復されているのではないだろうか。すなわち、この匿名の女性が「処女か細君か」あるいは素人か玄人か不明だという「正体」の分からなさとして、全編にわたって繰り返される、対象の意義の確定しがたさの問題が反復される。

女の容貌は始めから大したものではなかつた。（略）其代り色が白くて、晴々しい心持のする眸を有つてゐた。（略）其時敬太郎の頭に、此女は処女だらうか細君だらうかといふ疑が起つた。（略）見懸からいふと或は人に嫁いだ経験がありさうにも思はれる。然し身体の発育が尋常より遥かに好いから殊によれば年は存外取つて居ないのかも知れない。夫なら何故あんな地味な服装をしてゐるのだらう。（略）敬太郎は年に合はして余りに媚びる気分を失ひ過ぎた此衣服を再び後から見て、何うしても既に男を知つた結

果だと判じた。其上此女の態度には何処か大人びた落付があつた。（略）さうして其表情の変化に又驚ろかされた。今迄後姿を眺めて物陰にゐた時は、彼女を包む一色の目立たないコートと、其背の高さと、大きな廂髪とを材料に、想像の国で寧ろ自由過ぎる結論を弄あそんだのだが、斯うして彼女の知らない間に、其顔を遠慮なく眺めて見ると、全く新らしい人に始めて出逢つた様な気がしない訳に行かなかつた。要するに女は先刻より大変若く見えたのである。切に何物かを待ち受けてゐる其眼も其口も、たゞ生々した一種華やかな気色に充ちて、夫より外の表情は毫も見当らなかつた。敬太郎は其中に処女の無邪気ささへ認めた。（略）男は脊が高いので後から見ると、一寸西洋人の様に思はれた。夫には彼の吹かしてゐる強い葉巻が多少錯覚を助けた。すると聯想が忽ち伴侶（つれ）の方に移つて、女が旦那から買つて貰つた革の手袋を穿めてゐる洋妾（らしやめん）の様に思はれた。（停留所　二十七～三十五）

千代子は、敬太郎が既に須永の門前でその後ろ姿を見かけた女性と同一人物であり、友人須永の従姉妹であることが後に分かるが、却ってその出自と帰属が明らかになってからは隠蔽される、千代子の「高等淫売」的な側面を観察しうるのは、「自我より外に当初から何物も有つてゐない男」須永ではなくて、南洋で大蛸と格闘したいと考えている敬太郎なのである。須永にとっては、「子供の時から一所に遊んだり喧嘩をしたり、殆んど同じ家に生長したと違はない親しみのある少女は、余り自分に近過ぎるためか甚だ平凡に見えて、異性に対する普通の刺激を与へるに足りなかつた」と評される、たんなる幼なじみの従妹でしかない存在が、敬太郎にとっては、夜の都会の灯火に浮かび上がる何か匿名の存在として、洗練された官能性から無邪気な初々しさまでを喚起しうる存在として現象する。仮に須永にとって千代子の同一性が揺らぎ、「技巧（アート）」か純真かという猜疑がもたらされても、それはたんに既製の二項対立からなる偏狭な振幅にすぎない。だが敬太郎が見る千代子は、あれかこれかの二項対立には解消されない振幅をはらんでいる。

この見知らぬ女性が与える印象の振幅は、その意味で、後に「須永の話」で展開される、千代子をめぐる「技巧（故意）」か自然かという問題の伏線としてあるのだが、ここで重要なのは、まさに洋杖の向きの意義を最終的に確定しようとしない――婆さんの「助言」が本当に「予言」だったのか否かを確定しようとしない――敬太郎であればこそ、この千代子の変貌ぶりをみてもそれを「処女」か「高等淫売」かのどちらかに片づけようとはしないということだ。須永はといえば、「それは僕にはどうしても偶然であるとは考えられなかった。もし偶然でないとすれば、――」と考える芥川の「僕」と同じように、千代子の振るまいに関して、「彼女は高木の事をとうとう一口も話頭に上せなかつた。其所に僕は甚だしい故意を認めた。（略）高木の名前を口へ出さないのは、全く彼女の僕に対する好意に過ぎない。（略）けれども若し親切を冠らない技巧（アート）が彼女の本義なら…

…。」と考える。芥川の「僕」が偶然性の裏に特定の同一的な意味を読もうとしたように、須永の一人称もまた、千代子の言動の裏に「技巧」という「本義」を読み込もうとする。一方は偶然性の問題であり一方は嫉妬（三角関係）の問題であるという個々の話題の差異を超えて、ここには、物事を一義的に確定することこそが――対象の真理を見抜くという形で対象を固定化することこそが――対象を把握することであるという立場がある。だがそれに対し敬太郎は、先刻までは予想だにしなかった、「一種華やかな気色に充ち」た「処女の無邪気さ」を見出したからといって、最初に受けた「年に合はして余りに媚びる気分を失ひ過ぎた」抑えた印象を誤りとして否定しようとはしないし、さりとて後で「洋妾（らしやめん）」に見えたからといって先ほどの「閑雅」な純潔な印象を撤回しようともしない。このように両義性を両義性として留保しうる視点が、須永の、技巧か純真かのどちらかに確定しようとする態度、白か黒かという二者択一でしか判断できない発想に対するあらかじめの相対化として機能している。敬太郎は、まさに「長い様な又短い様な、出る様な又這入る様な」洋杖を持ち、そして予言のような予言でないような助言を手にしていることによって、須永には決して見えない千代子の振幅を一挙に把握することになる。

そしてそれは、敬太郎の前身とも見なせる三四郎が、美禰子に関して、「正直か正直でないか（略）気障か気障でないか殆んど判断が出来ない」からこそ却って、彼女の「小さな溜息」を聞くところまでは漕ぎ着け得たことに似ている。三四郎は、たんに美禰子を「イブセンの女の様」で「乱暴だ」と評することしかできない一面的な広田先生や与次郎や画家の原口さんなどとは異なり、当時の東京の知識人階級共通の批評タームを体得する能力を欠き、「乱暴といふ言葉が、どうして美禰子の上に使へるか、それからが第一不思議であつた」からこそ却って、美禰子の唇を洩れる暗号ではない溜息を聞くことができた。《「結婚なさるさうですね」／「御存じなの」と云ひながら、二重瞼を細目にして、男の顔を見た。三四郎を遠くに置いて、却つて遠くにゐるのを気遣い過ぎた眼付である。其癖眉丈は明確（はつきり）落ちついてゐる。（略）女はやゝしばらく三四郎を眺めた後、聞兼る程の嘆息（ためいき）をかすかに漏らした》（『三四郎』十二）。それと同様に、敬太郎は、その一種幼稚なロマン主義・天真爛漫さの御陰で却って、須永には見えない、華やぎから落ち着きまでの各段階を一身に兼ね備えた千代子の多面性を賞美し得たのである。

九　「父母未生以前本来の面目」と洋杖（ステツキ）

以上の意味で、漱石が『彼岸過迄』で描き出す偶然性は、『門』や『歯車』や『城の崎にて』にみられた、何らかの特定の〝意味〟に帰着する偶然観に対する批判となっていた。敬太郎が遭遇する偶然は、二元の邂逅が、そこで何らかの意味が像を結ぶ交点として実体化されることなく、むしろ逆に、複数の視点を通じて交点の表象自体を解消することで、偶然性が「運命」という目的論的予定調和に回収されることを阻止する。そしてそ

れは結局、九鬼に典型的に示されていた、一元的な解釈主体に対する批判として機能することを意味するだろう。

そのように見てくると、なぜ洋杖の出自があれほど奇妙な拘りをもって叙述されていたのかということも見えて来るのではないか。『門』における偶然性は、九鬼の原始偶然（絶対的必然）を思わせる「父母未生以前本来の面目」によって根拠づけられているという意味で、始源に絶対的な自己同一性を想定するものとしてあった。ところがそれに対し、『彼岸過迄』の敬太郎にとっては、偶然の出会いを可能にする原因のそのまた原因の始源とは何か…と遡って行くと、「自分の所有の様な又森本の所有の様な、持主の何方とも片付かないといふ観念が、…」とある通り、そこには結局あの「だらしのない髯を生やした森本の容貌」しか浮かんでこないのであり、つまり二元の邂逅を可能にするこの洋杖がいったいどこに、誰に帰属しているのかがついに判然としないという意味で、純粋な始源への期待はあらかじめ壊されていた。

> けれども其奥に口髭をだらしなく垂らした二重瞼の痩ぎすの森本の顔丈は粘り強く残つてゐた。（略）さうして此凡庸な顔の後に解すべからざる怪しい物がぼんやり立つてゐるやうに思つた。さうして彼が記念（かたみ）に呉れると云つた妙な洋杖（ステッキ）を聯想した。（停留所　五）

つまり、宗助が閉ざされた門の向こう側に何かしら純粋円満な起源を予感するのに対し、敬太郎にとっては、森本という「漂浪者（ヴァガボンド）」から手製の彫刻を施した洋杖を形見に譲られたという事実しか与えられず、それは結局始源には何も無い（始源そのものが無い）というに等しかった。その意味で、この洋杖を示す「自分の様な又他人（ひと）の様な、長い様な又短い様な…」という両義的な表現は、まさに『門』の「父母未生以前本来の面目」のパロディなのであり、要するに純粋な始源――無限に遡ることによって遂に行き着くことのできる真の自己――という神話を奇妙な嗤いによって打ち壊す機能をこそ帯びているのである。

そう考えると森本という、「風呂の後」の章で早々に消えてしまう、「須永の話」「松本の話」といった主要な「話」とは全く関係がないように見える登場人物が是非とも必要であった理由も分かるだろう。つまり、停留所での二元の邂逅を可能にし、短篇連作方式を導くという意味で『彼岸過迄』の物語の起源であるかのように見えるこの洋杖が、敬太郎のアイデンティティに属しているのかいないのか定かでない「解すべからざる怪しい物」であることによって、『彼岸過迄』は『門』や九鬼の偶然論に体現される一元的な純粋な始源を想定する立場を批判しているのである。そしてそれは同時に、「本当の母子（おやこ）ではない」「継母と継子」として生まれた須永自身の出自＝起源の問題をめぐって、敬太郎の洋杖があらかじめ、純粋な正嫡の出自という観点を相対化していたことを示すだろう。このとき、敬太郎にとって彼の運命を左右する洋杖の起源が、その相手と懇意で

あると誤解されることが「未来を有つ青年として大いなる不面目だと感じ」られるような、「貴方のは位置がなくつて有る。僕のは位置が有つて無い。それ丈が違ふんです」と自らを規定する「浮浪の徒」森本と絡まり合っていることは極めて重要である。それは宗助が垣間見る門の向こう側の純粋さと比べ、決して同一化・内面化できない嫌悪をはらんでいる。

そのことはまた、九鬼の偶然論が結局のところ三種の神器を語る日本精神に囚われていったのに対し[25]、『彼岸過迄』がこの物語の起源ならぬ起源を、大陸に出稼ぎにゆき「恐らくはのたれ死といふ終りを告げるのだらう」浮浪の徒森本に置くことによって、「日本」に還元される線的で自己同一的な目的論を回避していることを示すだろう。

以上の通り、『彼岸過迄』は物語の起源に森本という「漂浪者（ヴァガボンド）」を配することによって――ということは起源そのものを斥けることによって――、九鬼に代表される、起源の同一性において邂逅した他者を内面化してゆくような偶然観への批判となっていた。それは、「自分の様な又他人（ひと）の様な」洋杖によって、「離れるとも即くとも方の附かない」という作者自身の言葉を反復することで、この世界が、始源において先取られた「予言」通りに、「建築家の図面」のごとく「計画通り」[26]に進行すると考える、全てを終わりから見通す目的史観を批判しているのである。

そのように見てきた上で、最後に、探偵行の途中で、敬太郎が暗い空の奥行きを見上げて「偶然考へた」内容について見ておくならば、それは、「地面の上を照らしてゐる人間の光」に押しひしがれた、「落ち付かない」目的意識の外部に、そのような必然と偶然の閉じた円環には関わりがない、広大な無関心が拡がっていることを暗示しているのではないだろうか。

> さうして待ち草臥れた眼を移す毎に、屋根の上に広がる黒い空を仰いだ。今迄地面の上を照らしてゐる人間の光ばかりに欺むかれて、丸で其存在を忘れてゐた此大きな夜は、暗い頭の上で、先刻から寒さうな雨を醸してゐたらしく、敬太郎の心を侘びしがらせた。（略）
>
> 闇より外に何も眼を遮ぎらない頭の上は、彼の立つてゐる電車通と違つて非常に静であつた。彼は頬の上に一滴の雨を待ち受ける積で、久しく顔を上げたなり、恰好さへ分らない大きな暗いものを見詰めてゐる間に、今にも降り出すだらうといふ掛念を何処かへ失なつて、こんな落ち付いた空の下にゐる自分が、何故こんな落ち付かない真似を好んで遣るのだらうと偶然考へた。同時に凡ての責任が自分の今突いてゐる竹の洋杖（ステッキ）にあるやうな気がした。（停留所 三四、三五）

たった今敬太郎が囚われ、その中の論理に従って成功や失敗といった分節化を目まぐるしく行っている「物語」の外に、その「物語」には決して取り込まれることのない、「闇より外に何も眼を遮ぎらない」広大な湿り気が広がっている。そのこと

が、「人間の光」が這いつくばる地面の彼方に、敬太郎が巻き込まれている擾乱には最初から最後まで関わることのない、いかなる「必然―偶然者」にも回収されない無限の無関心が広がっていることを暗示する。あたかも『明暗』において、清子の「本心」を確かめるために「偶然」を装って温泉宿に現れた津田が、星月夜の中に古松や滝を見て、「あゝ世の中には、斯んなものが存在してゐたのだつけ、何うして今迄それを忘れてゐたのだらう」と考え、そして真夜中の山峡から沸き出す清水の渦のなかに、自らが囚われている文脈の外部があるということを垣間見るように、敬太郎もまた、「絶対者」の同一律に内面化されるべく設定された「運命」の外部に、そういった意味づけから解き放たれた広大な「落ち付き」の存在を垣間見るのである。

【注】

1　夏目漱石『彼岸過迄』東京、大阪朝日新聞、一九一二年一月～四月

2　夏目漱石「彼岸過迄に就て」東京、大阪朝日新聞、一九一二年一月

3　小宮豊隆『漱石全集』六巻「解説」、岩波書店、一九三六年八月

4　九鬼周造『偶然性の問題』岩波書店、一九三五年十二月

5　なるほどこの「絶対的必然」は、九鬼が、「同一律による内面化は事実として邂逅する汝の偶然性に制約された具体的内面化でなくてはならない。（略）単なる同一化、単なる必然化は一切の汝、一切の偶然性を否定することによつて無宇宙論へ導く」と言う通り、たんなる空虚な必然性ではなく、必然と偶然の相互制約（必然―偶然者）としてあるとされてはいた。しかし、この必然性と偶然性の相互媒介の概念が、和辻哲郎の倫理学における全体者と個人の「弁証法」と完全に同じ構造であることから分かる通り（九鬼の偶然性／必然性の対立は、和辻の個人／全体者の対立と正確に対応している）、偶然性＝個人は、結局は全体者＝絶対的必然性を実現するために「弁証法」的に止揚されるべき契機にすぎない。事実、九鬼も「絶対者の弁証法」と書く。以下に両者の記述を列挙する。

九鬼周造…「およそ全体と部分とは相関に於て意味を有つてゐる。部分なくして全体なく、全体なくして部分はない。従つて絶対的形而上的必然の必然性は形而上的偶然の偶然性なくしては考へられない。形而上的偶然の偶然性もまた絶対的形而上的必然の必然性なくしては考へられない。絶対的必然の必然性は偶然性を部分とする全体の有つ必然性である。必然性は偶然性を制約し、偶然性は必然性を制約してゐる。要するに絶対者は空虚なる抽象的全体でなく充実せる具体的全体である限り、単なる必然者でもなく、単なる偶然者でもなく、必然と偶然との相関に於て意味を有する「必然―偶然者」である。さうして絶対者は相対的なる有限者によつて初めて絶対者たり得るもの、換言すれば偶然的部分として他在することによつて初めて絶対的全体の具体的意味を獲得するものであるから、「必然―偶然者」としての絶対者は絶対者の弁証法に於ける即自且対自の段階と考へても差支ないであろう。」（『偶然性の問題』第三章十三）

和辻哲郎…「さうすれば個人と全体者とは、いづれもそれ自身に於て存せず、たゞ他者との連関に於てのみ存するのである。ところでこの他者との連関は、いづれも否定的関係であった。個人の独立性は全体者に背くところにあり、全体者の全体性は個人の独立を否定するところにある。

従つて個人とは、全体者が成り立つためにその個別性を否定せらるべきものに他ならず、全体者とは個人が成り立つためにそこから背き出るべき地盤である。他者との連関に於て存在するといふことは、他者を否定すると共に他者から否定せられることに於て存在するといふに他ならない。人間の間柄的存在とはかゝる相互否定に於て個人と社会とを成り立たしむる存在なのである。だから人間存在に於ては、先づ個人を立してその間に社会関係の成立を説くことも出来なければ、また先づ社会を立してそこから個人の生成を説くことも出来ない。（略）だから先なるものはたゞこの否定のみであると云つてよい。（略）云はゞこの否定その者が個人及び社会として己れを現はしてゐるのである。」（『倫理学』第一章第四節「人間存在の否定的構造」岩波書店、一九三七年四月、傍点和辻）

6　九鬼周造『「いき」の構造』岩波書店、一九三〇年十一月、初出は「思想」一九三〇年一、二月

7　前田愛「仮象の街」、「現代詩手帖」、一九七七年五月

8　運命という概念に依拠するのは須永市蔵の語りも同じである。「もう遅過ぎる、時機は既に去つたと運命から宣告される様な気がした。」（須永の話　十一）「千代子と僕に高木を加へて三つ巴を描いた一種の関係が、夫限発展しないで、其中の劣敗者に当る僕が、恰も運命の先途を予知した如き態度で、（後略）」（二十五）。

9　この点に関しては、佐藤泉が以下のように言っている。『彼岸過迄』「緒言」でもうひとつ注目される言い回しは「離れるとも即くとも」というものだ。奇妙なことにこの言い回しは、作中人物である森本の残した「洋杖」の（略）状態として何度か反復されている言い回しをあらかじめ先取りしたものであることに気づくだろう。（略）こうした言い回しがあらかじめこの小説じたいの構成を形容していた言い回しでもあるという点で、この洋杖は物語内の小道具のレベルと、物語を外から語る構成原理レベルとに同時にかかわってしまうという奇妙な位置を占めている。これを手に敬太郎は他人の物語を聞くのであり、それがこの小説が持続する動因となっている。だが、そうだとすればこの小説は物語の境界をなし崩しにするためにこそ語られている物語でもあるだろう。」『彼岸過迄』―物語の物語批判―」「青山学院女子短期大学紀要」一九九六年十二月

10　戸坂潤「シェストフ的現象に就いて」「文学評論」一九三五年二月

11　「いったい純粋小説に於ける偶然（一時性もしくは特殊性）といふものは、その小説の構造の大部分であるところの、日常性（必然性もしくは普遍性）の集中から、当然起つて来るある特殊な運動の奇形部であるか、あるいは、その偶然の起る可能が、その偶然の起つたがために、一層それまでの日常性を強度にするかどちらかである。この二つの中の一つを脱れて偶然が作中に現れるなら、そこに現れた偶然はたちまち感傷に変化してしまふ。」横光利一「純粋小説論」「改造」一九三五年四月

12　芥川龍之介『歯車』「文藝春秋」、一九二七年十月

13　海老井英次は、『歯車』における「偶然」と「運命」について以下のように言う。「アトランダムな日常的な〈現象〉が因果律をはらむ〈運命〉的な事々へと変化してしまうのである。（略）何度かの「レエン・コオト」との遭遇を〈偶然〉であると片付ける理知的な合理主義の立場は一気に崩れてしまい、すべてが連鎖的に結合して〈運命〉を合成してしまうのである。」『芥川龍之介論攷―自己覚醒から解体へ―』桜楓社、一九八八年二月

14　「彼は「或阿呆の一生」を書き上げた後、偶然或古道具屋の店に剥製の

白鳥のあるのを見つけた。（略）彼は彼の一生を思ひ、涙や冷笑のこみ上げるのを感じた。彼の前にあるものは唯発狂か自殺かだけだつた。彼は日の暮の往来をたつた一人歩きながら、徐ろに彼を滅しに来る運命を待つことに決心した」。『或阿呆の一生』四十九、「改造」一九二七年十月

15 芥川龍之介『西方の人』「改造」、一九二七年八月

16 志賀直哉『城の崎にて』「白樺」、一九一七年五月

17 勿論、以上の稿者の記述は、『城の崎にて』の「自分」の語りに従うならばそうである〟かのように〟見えるというにすぎない。従って以下では、まさに「自分」が意図に反して語ってしまっていることをこそ見なければならないだろう。

18 「不可能に近い極微の可能性が偶然性に於て現実となり、（略）更に可能性が必然性へ発展するところに運命としての仏の本願もあれば人間の救ひもある。」（『偶然性の問題』結論）

19 中村光夫『志賀直哉論』文藝春秋新社、一九五四年四月、初出は「文学界」一九五三年一、四、七、九、十一、十二月

20 「賽の目の有つ離接的可能性を取入れて偶然の遊戯をする場合を考えてみよう。」（『偶然性の問題』第三章八）「賽の目の如くに投げ出された離接肢の一つが実存の全幅をゆり動かしながら実存の中核へ体得されるのが運命である。」（第三章十三）

21 田辺元は、偶然性の問題は「単に自然的事物の在り方に属するのでなく、人間存在自覚の関係に於て「運命」と呼ばれる存在の規定であればこそ、人間存在全体の問題となり、我々を生死の関頭に立たしめるのである」としつつ、九鬼と同じく「運命は必然にして同時に偶然でなければならぬわけである。（略）実存はこの二律背反的矛盾存在として運命を自覚するのである。」（四）とする。『マラルメ覚書』筑摩書房、一九六一年八月、初出は「聲」一九六〇年八、九、十号

22 芥川龍之介『文芸的な、余りに文芸的な』「改造」一九二七年四月

23 「要するに人世に対して彼の有する最近の知識感情は悉く鼓膜の働らきから来てゐる。」（結末）

24 「彼の役割は絶えず受話器を耳にして「世間」を聴く一種の探訪に過ぎなかつた。」（同）

25 「日本的性格として日本文化の中に含まれてゐる自然、意気、諦念の三契機が相即融合する貌を見て来たのであるが、この相即融合を象徴してゐるものが三種の神器であると考へることができないであらうか。」九鬼周造「日本的性格」『人間と実存』岩波書店、一九三九年九月所収、初出は「思想」一九三七年二月

26 以下の漱石の言葉では「離れるとも即くとも方の附かない」ということと「予言の出来かねる」「計画通りに進行しかねる」ということが不可分である。「思ふやうになるかならないか自分にさへ予言の出来かねるのが述作の常であるから、今度こそは長い間休んだ埋合せをする積であると公言する勇気が出ない。」「けれども小説は建築家の図面と違つて、いくら下手でも活動と発展を含まない訳には行かないので、たとひ自分が作るとは云ひながら、自分の計画通りに進行しかねる場合が能く起つて来るのは、普通の実世間に於て吾々の企てが意外の障害を受て予期の如くに纏まらないのと一般である。」（「彼岸過迄に就て」）

※漱石、志賀、芥川の引用本文は岩波書店の全集（以下順に一九九三年十二月～九十三年三月、一九九八年十二月～二〇〇二年三月、一九九五年十一月～九八年三月）に拠った。

（筑紫女学園短期大学非常勤講師）